

たまには良い本屋をウロついてみよう

南野, 森
九州大学 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/7432825>

出版情報 : 法学セミナー. 65 (5), pp.1-1, 2020-04. NIPPON HYORONSHA

バージョン :

権利関係 : The pdf file cannot be copied and printed due to the publisher's policy.



たまには良い本屋を ウロついてみよう

九州大学教授
南野 森(憲法)

岩波ブックレット NO.161
ほんとうの自由社会とは
——憲法にてらして
樋口陽一著
岩波書店、1990年



なぜ憲法の研究者を志したのか、と聞かれることがある。私が大学生だったのはもう30年も前のことだから、記憶の曖昧な部分が多々あるし、後付けの部分もあるかもしれないが、私の場合、「時代状況」が影響したのではないかと思っている。

高校3年生の正月に昭和天皇が亡くなった。前年秋から重体と伝えられ、世はいわゆる「自粛」ムードとなった。得体のしれない空気や圧力を感じ、多くの人が周囲と同じように、控えめな行動をとるといふ現象が広く観察された。

改元後の春に大学へ入ったのちも、大きな出来事がいくつもあった。まず6月の天安門事件。自由を求める市民や学生に自国の軍隊が火を噴くというのは、衝撃以外の何ものでもなかった。7月の参院選では55年体制以降で初の「ねじれ国会」に。11月にはベルリンの壁が崩壊。自由を求める東独市民がハンマーなどで壁を打ち砕き西独市民と抱擁する映像は、涙を流しながら見た。そしてプラハのビロード革命が続き、12月末にはルーマニアの独裁者が市民に処刑される――。

西洋近代憲法にとって、軍隊と君権をどうするかという問題こそが主眼にあったとすると、この一年の出来事は、いずれもまさに憲法問題であった。

樋口陽一教授の憲法講義が始まったのは、大学2年の前期、1990年4月であったが、授業よりも友人との付き合いの方が楽しかった当時の私は、前期中は講義に行ったり休んだり、行っても聴いたり寝落ちたり、という有り様であった。

そのようなとき、本書が生協書店に平積みされているのを偶々見つけたのである。後期が10月から始まる直前だったと思う。著者の名を見て、あ、僕らの憲法の先生だ、ぐらいにしか思わなかったのであるが、安かったこともあり、早速購入し読んでみた。

その結果、「1989-90年。去年からことしにかけての世界のうごきほど、歴史に立ち合う臨場感とでもいうべきものを感じとれる時期は、そう多くないでしょう。」との書き出しで始まる本書との出会いは、私にとって、文字通り画期となった。

そんな本書には、当時の私が赤線を引いた一文がある。「わずかでもちらつく可能性のなかにテコを差しこんで、日本社会を少しずつでも、それぞれの人びとがよいと思うようにうごかしていくという方向に向かって発言をするという役まわりは、必要なことです。」という一文を、悪友N君に示しながら、樋口っていうあの先生は偉い人だと思うよ、後期からは俺もお前もちゃんと授業に出よう、と深夜のアパートで熱く語った記憶がある。こうして2年後期からは、(憲法の)講義には休まず出席し、(憲法は)よく勉強し、後に同級生に重宝がられる詳しいノートも作成する。そして3年前期には樋口ゼミに入り、私の憲法修行が始まる。

あのとき本書と出会っていなければ、私は違う人生を歩んでいたかもしれない。そして本書が私の琴線に触れたのは、そういう時代状況にそういう本書を書いてくれた著者と、そういう本書を大量入荷しダメ学生の目にも留まるよう陳列してくれた書店員のおかげではないかと思う。